

## 一般演題 教育・その他 OP8-5 突発性難聴患者に対するコミュニケーション ツール活用の一報

○葛西千春<sup>1)</sup> 近藤敏哉<sup>1)</sup> 副島 徹<sup>1)</sup> 古澤 剛<sup>1)</sup>  
高倉照彦<sup>1)</sup> 鈴木信哉<sup>2)</sup>

- |                          |
|--------------------------|
| 1) 亀田総合病院 ME室            |
| 2) 亀田総合病院 救急救命科 高気圧酸素治療室 |

### 【背景】

2023年度、当院では第2種高気圧酸素治療装置（※以下、第2種装置）における突発性難聴の治療件数は前年の約2倍の増加となった。それに伴い、両耳の強度難聴患者や聴力検査スケールアウトの患者（以下、重症突難）の治療を対応する機会が増加した。従来、当院における対応は、筆談と定型的内容はフリップボードを活用していたが、患者対応が円滑に進まないという場面が多々あり、重症突難とのコミュニケーションの困難を強く感じた。今回、文字起こしアプリを活用しコミュニケーションの円滑化が図れないかと考え、臨床使用を試みたので報告する。

### 【目的】

重症突難におけるコミュニケーションについて、スマートフォン筆談アプリ（※以下、アプリ）の活用性を検討する。

### 【方法】

今回、重症突難3名に対してアプリの使用でコミュニケーションを図った。

### 【結果】

アプリの文字変換の即時性は高く、通常の会話スピードに追従できるレベルであった。しかし、音声認識の精度に関しては、やや誤変換が見受けられた。しかし、誤った情報が患者に伝わり混乱を招くような重大な誤変換は無かった。また、通常の会話で使いがちな、「えー」や「えーと」といった会話の言い淀みまで表示されてしまう為、可読性を上げるためには、なるべくこういった言葉を使わないような工夫が必要であった。総じて、アプリ使用により、治療前のコミュニケーションの円滑化が図れた。

### 【考察】

アプリの活用により、患者対応の円滑化が図れたことで、患者からの自発的な会話が増加したと考える。患者が自身の症状や健康に関する情報を訴えやすくなるということは、より良い信頼関係の構築につながる。これは、治療満足度の向上になると共に、より多くの患者情報を元に治療が開始できるため、より安心・安全なHBOの実施が期待できる。

### 【結語】

今回、治療前のコミュニケーションにおいてアプリが有効的に活用できることを確認できた。今後は積極的にアプ

リを使用していき、サンプル数を蓄積すると共にアンケートの実施で患者評価を踏まえた定量的な評価をする必要がある。また、治療前、治療中問わず使用できるコミュニケーションツールとしての運用を目指し、治療装置内の患者とのコミュニケーションへの応用を検討中である。